

松山市が産地化を目指しているアボカドが、市内で収穫最盛期を迎えている。若い女性を中心に人気の「森のバター」が鈴なりに実を垂らし、目を浴びて緑色に輝いていた。

市などによると、市は2009年から産地化の取り組みを始め、16年度は生産者101戸(計4.5ha)で約1トを収穫。本年度は前年度の1.2～1.5倍の収穫量を見込み、10年後には10トを目指す。同市は栽培面積などが全国一とされ、主に東京のデパートなどに出荷している。

松山産は輸入品に比べて果実が大きくしっかりしており、食べ頃になっても外皮が緑色のままなのが特徴。品種ごとに10月下旬から3月ごろまで収穫が続く。

6日は森茂喜さん(65)が高浜6丁目の約40坪の園地で若者らと主力品種「ピンカートン」の収穫作業に追われた。高さ7～8メートルになる木から250センチほどの実をはずとみで慎重に切り落としていた。森さんは「爽やかさや新鮮さを感じてほしい。おすすめめの料理はアボカド入りのピラフかな」と笑顔を見せた。(竹下世成)

松山印「森のバター」アボカド収穫最盛期



収穫最盛期を迎えたアボカドを切り落とす森茂喜さん

11月6日午後2時ごろ、松山市高浜6丁目